
異世界で村人になったよ！

緑道木通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で村人になったよ！

【Nコード】

N6239Z

【作者名】

緑道木通

【あらすじ】

そこは魔法とか剣とか勇者とか魔王がいるようなファンタジーな世界だった。

でも既にその時代の魔王は勇者と異世界から来たという神子が倒して、人々は割と平和に時を過ごしていた。

そんな既に全て終わった世界に、何の気まぐれなのか、よくある普通で平凡な女子高生がトリップしてきてそのまま住み着くことになった。

そんな彼女の普通で平凡な日常のお話し

第0話「えっ、何故に？」

それは突然の出来事だった。

緑生い茂る生命力半端ないでしよって感じの森（むしろ樹海）の中に寝巻き姿で何故か私はいた。

「えっ、何故に？」

いや、本当に何故に私はこんな所にいるんですかね？

…えっいや本当になんで？！

割と精神的に強いと思われる私でも流石に思考停止とかになっちゃいそうなんですけど！

*

そんな感じで他の事を考えられなくて同じ疑問にもんもんしていると、後ろの茂みからガサツという音がした。

その時の私には余りにも不意打ちだったので、大袈裟なほど体をビクツと反応させてしまった。

この時私はやっと今いる場所の異様な静けさに気付いた。

（なんでこんなに静かなの？）

一度それに気付いたおかげでいくらか冷静には慣れたけど、その分緊張という恐怖に心拍数がドンドン早くなっていくのを感じた。

（後ろを振り向くべき、なのかな）

それとも、振り向かずにこのまま前に全力で走った方が良いのか、と一瞬悩んだ。

私の頭じゃどちらが正しい答えなのか分かるはずもなく、普段じゃ感じる事が出来なかった本能の<逃げろ>という感覚に従う事にした。

つまり、全力で走った。

「っ！！？」

走り出してすぐに、本能に従ったのは正しいかもしれないと思った。

（何かが、追いかけてきてる）

私は得体の知れない何かが追いかけてくるのを本能的に感じたのだ。バクバクと恐怖に思う気持ちが心拍数をドンドン早くさせていく。不気味な静けさを保つ森の中では私と何かが踏み砕いた枝の音が目立った。

（痛いっ！）

走れば音がたつ、これは当たり前前の事だから別に良い。

でも、私の今の格好では例え整えられた道でも全力で走るには辛かった。

何も守る物を着けていない素足に容赦なく木の枝が刺さり傷を付けていくのだ。痛みに耐性なんて全くない私にはかなり辛い。

でも、足を止められるほどのモノではなかった。止めてしまったら痛み以上の死が待っているのは私の頭でも容易に想像出来たからだ。

「あっ！！」

でも、限界が訪れるのは早かった。

特に体を鍛えていた訳でもない私の体が、迫ってくる何かから逃げ出せるほどの体力もなく、足が縛^{もつ}れて勢いよく上半身から転んだ。パジャマの所々は破け、色んな所に血が滲^{しみ}んでいた。

「っ……ああ」

私はバツと後ろを振り向いて後悔した。

そして、何故、とあまりにも理不尽な現実^{じげん}に悔^くしさが溢れ、しだいに視界がぼやけていった。

其所に居たのはギョロつとした紅い目と腐りかけか体と異臭を放つ、黒色をした大きな狼のような化け物だった。

「い、やだっ……なんで、なの？わからない、分からない解らない判らない。こんなの知らない！！」

私が叫ぶのとほぼ同時に、化け物は私を食べようと飛びかかった。それに対して何か出来るはずもなく、私はギョツと固く目を瞑った。

でも、直ぐに来るだろうと思った死は訪れなかった。

「逃げるぞ！」

「あっ！」

それは若い男性の声だった。

彼は私が目を開く途中で私の腕を掴み半ば引きずるように走り出し

た。

今の私に疑うなんて高度な思考が出来るはずもなく、後ろで化け物が動く気配に恐怖しながら必死に体に鞭を打った。

N E X T .

第1話「…うい」

はあはあ、と私たちは呼吸を乱していた。それほど全力で走っていた。

今はまだあの森は抜けていない。割と大きな湖がある広い空間に居る。

私を助けてくれたと思われる彼はまだ此方に背を向けたままだ。

あの化け物が追いかけてくる気配はない。

はあ、とだいぶ息が整ってきた頃、私は思考が戻っていくの感じた。おかげでパツとしか確認していなかった周りの環境を細かく観察することが出来た。

そこで、ふと違和感に気がついた。夜にしては明るいのだ。彼の背中や私の服装がしっかり見ることが出来るくらいに、明るい。

そこでそつと空を見上げた。そこには大きな満月が存在していた。

「…凄い」

その満月の存在感からか思わず口から言葉が漏れた。

目の前の彼が振り向く。

思わず目を奪われた。別段、顔の作りが良いとかそういうことではない。

ただ、彼の自然に鍛えぬかれた筋肉や今まで見たことも感じたこともないような素の真剣さ・真面目さを感じ、私の何かが惹かれたのだ。

「、あ」

「何で」

「？」

「何でこんな時間にこんな場所でそんな格好でいるんだ？」

声を掛けようとしただけなのに、その言葉を遮られ、掛けられた言葉は穏やかなものではなかった。

普段の私なら、普通に受け答え出来たであろうそれも、いくら今はさつきよりも落ち着いていたとしても、普通じゃ体験することはない初めての恐怖をこの短い時間の間で強烈なまでに体験したばかりなのだ。返せる言葉なんて出るわけがなかった。

「っっ」

「な、なんで泣く！？」

「そん、つなの私だって分かんないってば！」

「はあ？」

彼の声には呆れが含まれているようだったが、鋭さが目立つ怖い印象を受ける顔にはどこか慌てているような困った表情を浮かべていた。

そんな彼を見ていると泣いている自分が馬鹿なように感じて、さつきまっで泣いていたのが嘘のように笑いそうになってしまった。

「…落ちついたんだな」

いや、笑っていたようだ。

これが俗に言うギャップというもののかな？　だったら、ギャップの力ってかなり強いんだなと思った。

「うん、もう大丈夫じゃないけど大丈夫…です」

しまった。どう見ても彼の方が年上なのに思わず素で話してしまった。

「別に良いさ、そういう風に話されるような立場でも柄でもないからな」

「…ありがと」

「ん、俺も悪かったな。怖い思いをしたばっかなのに、あんな言い方しかでなくてよ」

「ううん、もう大丈夫、少しパニックになってただけだから、…普段はあんなことじゃ泣かないから、ね。貴方も気にしないで良いよ」

「…分かるのか？」

「顔に出てるよ」

「そうか…」

いつの間にか場の雰囲気は良いものになっていた。

「ま、今は安全でもまた奴みたいなの来るかもしれないからね。」

お前が良いならだが、夜も遅いし俺の家に来るか？」

彼の態度は堂々としていたが、言い方はしどろもどろって感じだった。

流石に夜中に私みたいなちんちくりんな女でも、呼ぶのに気まずさみたいなものでも感じているのかな？

「お世話になります」

「ん、詳しい話もそこだな？」

「…うい」

なんと説明すればいいのやら…、

自分でもよく分からないのにどうしようかとまたもんもんしつつ、力強い足取りで私の前を進んでいく大きな背中を見つめながら足を一歩踏み出した。

「あ、名前聞いてないや」

NEXT・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6239z/>

異世界で村人になったよ！

2011年12月21日20時51分発行